

宮田光雄著

## 『平和のハトとリヴァイアサン』

——聖書的象徴と現代政治』

(四六版, viii+335p. 岩波書店, 1988年)

柴田 有

本書の基調は平和への祈りである。その内容は、個別に発表された5本の論文であるが、ハトとリヴァイアサンという二つの象徴に注目し、その解釈史の流れのなかでひとつになっている。

- I 平和のハト
- II リヴァイアサンとビヒモス
- III カール・バルト
- IV ボンヘッファーと日本
- V 福音と平和

ハト派とタカ派という表現がよく用いられるけれども、本書では、創世記の「ノアの箱舟」の話で神と人間の和解を象徴するハトと、神に敵対する権力の象徴、ヨブ記の海獣レビヤタンとが対置される。この海獣の名を英語読みすれば、リヴァイアサンである。そこで本書のIとVのモチーフはハトであり、間にはさまれるII-IVのそれはリヴァイアサンであると、大略の構図をとらえることができよう。こうした聖書的象徴が、どれほど政治的象徴として活躍するかは、本書の内容が興味をそそる理由のひとつである。なおIV「ボンヘッファーと日本」は、天皇制ファシズムにも眼を向けており、またこれは一昨年7月に明治学院大学キリスト教研究所で行われた、20周年記念講演が底稿になっている。

著者宮田光雄は政治学者ではあるが、キリスト教についても豊かな学識を備え、キリスト教徒の立場から執筆している。まず聖書学については現代の主流となっている歴史文献学的分析の成果を取り入れており、神学思想の面ではバルト主義への傾倒がうかがわれる。このほか図像解釈への関心も深く、本書には多数の図版が入っている。これは本文と同じ重みをもつものである。それだけにキリスト教神学への予備知識が手薄な読者にとっては、III-Vのあたりがやや難渋す

る章となるかもしれない。しかし、キリスト教がなぜ現代政治の問題に発言権を有するのかという問いを手放すことなく、注意深くたずねるならば、本書に著者の平和思想を読み取ることができるであろう。次にその内容を一、二紹介してみたい。

宮田光雄の政治学者としての立場は、第二章「リヴァイアサンとビヒモス——聖書的シンボルの政治学」に見ることができる。そこでまずこの章に注目しよう。旧約のヨブ記40-41章には、二種類の怪獣が描かれている。第一は陸にすむ草食獣ペヘモット(=ビヒモス)であり、第二は海にいて口から火を吐くレビヤタンである。聖書協会訳ではそれぞれ「河馬」と「わに」と訳されているが、いずれも神話上の猛獣であって、巨大な力の象徴なのである——とくに後者については、「この地上に、彼を支配する者はいない」(新共同訳)と言われる。ペヘモットもレビヤタンも、それが一体何をあらわすのか聖書解釈上の問題点として、今日なお議論がつづいている。

しかしレビヤタンが象徴としてもっとも激しい論争の渦を巻き起したのは、支配と権力の象徴として政治の世界に登場した時であった。すなわち1651年にロンドンで出版された、トーマス・ホブズ著『リヴァイアサン、すなわち教会のおよび市民的國家の質料、形相および力』がそれである。以来レビヤタンは政治学のシンボルとなる。ナチスの理論的基礎となった、カール・シュミット著『トーマス・ホブズの國家論におけるレヴィアタン』(1938年)は広く知られており、現代欧米の政治学研究誌にもこの象徴をタイトルに付したものがあつた。日本でも『レヴィアサン』という季刊誌が出ているようである。

ホブズの『リヴァイアサン』にもどらう。その出版年代を見れば、公刊の時期が三〇年戦争という残酷

な時代を終結させた、ヴェストファーレンの宗教和議（1648年）からほんの数年後のことであったことが分る。（ちなみにオリブをくわえるハトが、洪水のハトとか聖霊のハトとしてではなく、地上の政治的平和の象徴として多くあらわれるようになるのも、三〇年戦争以後であると言う。本書 35 頁）。この宗教紛争と内乱の歴史がもたらした結果にたいする冷厳な認識に立って、ホッブズはまず人間本性を次のように見定めるのである。「人間は、生来、エゴイスティックで非社会的な存在であり、あくことのない力への欲求と暴力死にたいする恐れによって駆り立てられる。」（同 73 頁）。つまり人間の原始状態は「万人にたいする万人の闘争（Bellum omnium contra omnes）」であり、「人間は人間にとっての狼である」。ホッブズはこの人間観から出発して、彼の国家観を打ち出すことになる。

人間がこのような自然状態から脱し、暴力死にたいする恐怖を克服する道はただひとつしかない。それは独立した個人々が各人の権力とつよさを「共通の権力」、すなわちひとり人間またはひとつの合議体に委譲する方法である。この統一は各人对各人の契約によって成立する。「こうして一人格に統一された群衆は、コモン・ウェルス、ラテン語ではキウィタスとよばれる。これが、あの偉大なリヴァイアサン、むしろ（もっと敬虔に言えば）あの可死の神（Mortal God）の、生成であり、われわれは不死の神のもとで、われわれの平和と防衛についてこの可死の神のおかげをこうむっているのである。」（同 74 頁）。ここでレビヤタンは擬人化されていることに注意したい。国家権力の象徴レビヤタンは、契約という人為的操作によって生まれた人工人間、あるいは「巨大な人間（magnus homo）」なのである。象徴の新しい解釈がここで展開している。それは魂も関節も神経も備え、健康・病気・死を経験する。

したがって「巨大な人間」はもちろん理性を有している。そして私的な理性は、この公共の理性に従属しなければならない。そうすることによって国家は、個人々人を暴力死の危険から保護するのである。また聖書の解釈についても、解釈権は主権者が有する。さらに神の意志は主権者を通してのみ告知される。こうして国家権力は地上にあって限りなく神に近づくことになる。ホッブズの『リヴァイアサン』においてナチスの

国家観を予感する人々が出てきたのは、この面から見るとうなずけるのである。しかし宮田はこの見方に反対する。ホッブズの思想の近代性の面を見落してはならないと言うのである。そこには聖俗両権の限界づけ、すなわち教皇権の制限と国家権力の確立という意図が働いていたのだ。そのために後者が無限に強大化するかに見える場合がある。しかし——と宮田は言う——ホッブズは個人の内面の自由というものを保証していた。各人は内面において、教会の教えを信じる自由も信じない自由も有する。しかし公的な信仰告白がなされる場にあっては、私的な理性は公共のそれに従属しなければならない。これが信仰や良心の内面留保の可能性と呼ばれるものである。そしてまさにこの点で、ホッブズの国家観はナチズムと区別されなければならない、と著者は主張する。

先に名を挙げた“ドイツのホッブズ”カール・シュミットに、ここで発言してもらおう。シュミットによれば、ホッブズ的な国家主権は、その内面留保によって破綻を生じる。公権力にたいする小さな内面留保にすぎなかったものが、逆に、個人の自由を枠組の構成原理として公権力をたんなる《留保》とする個人主義的国家観にまで逆転するからである（同 84 頁）。内面的信仰と外面的信仰告白との区別が、強力なリヴァイアサンを内から弱体化させる原因だと言うわけである。

ではこの内面留保の原則を支えているものは何か。それは、シュミットによれば、「休むことなく動くユダヤ人の精神」やフリーメーソンなどの秘密結社なのである。内面的信仰こそ国家権力にヒビを入れるユダヤ的な戦術なのだ、彼は想像したのだった。そしてこの断定が次のステップで意味するのは、信教の自由のために闘うキリスト教会、すなわちドイツ告白教会の抵抗を、ユダヤの問題として誹謗することであったと、宮田は述べている（同 88 頁）。なお本書のⅢ、Ⅳ章は、告白教会側の戦列に身を置いて戦ったバルト達の活動を扱っている。

シュミットの描くリヴァイアサン国家は、ホッブズのリヴァイアサンが負っていた弱点を克服しつつ、ホッブズが真に目指していた（とシュミットの解釈する）ものを完成するのだということになる。こうしてファシズム期の全体主義国家は、国家の統一性のために個別の思考を許さない、全能のリヴァイアサンと呼ぶ

ことができる。その命令規範は真理ではなく権威である。すなわち、国家の実定的な決断である。この強大なリヴァイアサン国家にたいしては、法的にも事実的にも、抵抗権の成立する余地はない。したがって国家と社会の分離という近代社会の原理も、ここでは容認されず、私的・社会的な人格と国家における法的な人格との区別も存在しない。すなわち経済活動・居住・職業の選択・教育など、いずれも公共の安寧と平和を脅かさないかぎり国家的規制を免れるというこの一線を踏み越えて、国家の支配が一元的に貫徹されることになるのである。

ヨーロッパの政治史が、教会史とからみあって展開する様が、以上に紹介してきた内容からも、ある程度理解していただけたことと思う。教会とか信仰が政治的でありうること、また逆に政治は宗教的でありうることを歴史は、示している。しかしその結果はしばしば悲惨なものである。教皇権と三〇年戦争あるいはナチスの神的な全体主義国家を教材として挙げておこう。キリスト教徒とすれば、ここで深刻な問題に立ち向かわざるをえないことになる。信仰者は（原理的に）いかにして政治的实践に参与できるのか、また（現実的に）いかなる形で参与すべきか。言い換えれば、キリスト教神学と政治問題とはどこで必然的な連関をもっており、いかに実践的な選択をするか、である。著者宮田の導きの星となった神学者カール・バルトは、この問題に答えようとした。ドイツの教会にハーケンクロイツの旗がひるがえり、ナチ党歌がルターの讚美

歌とともにこだました1930年代の情況において、バルトは活動したのである。その思想は、「神の希望の弁証法」（本書Ⅲ章6節）などで取り上げられている。

最後に、以上の内容紹介にくわえて、第Ⅱ章に対する疑問を一点だけ述べさせていただきたい。それはホッブズの人間理解に発する問題である。人間の本性すなわち心が、「あくことのない力への欲求と暴力死にたいする恐れによって駆り立てられている」とする見方は、たとえ歴史の現実にたいする冷徹な判断であるとしても、やや単純に過ぎはしないだろうか。現にホッブズにおいて、このような性向の心は、同時に信仰の宿る内面としても、あるいは理性の働く場としてもひとつの心なのである。人間の心はひとまず両義的と言わねばならない。にもかかわらず悪性の面をまず前提して国家権力を理解する時、否応なく内面の留保ということが要請されざるをえない。なぜならこの前提からすれば、「巨大な人間」もまた悪しき心性を、どこかに隠し持っているに違いないからである。その強大な力が社会を圧迫する時がくれば、個々人が最後に守るべき城塞は己の内面なのだと言う。ところが、何よりも大切な自己の内面とは、もともとエゴイズムの住み家とされたものではなかったのか。その心がこの局面になると、もっぱら内面の自由であるとか信教の自由とかのとりでとして、変容するように見受けるのである。評者の眼には、この話はどこかしら奇妙である。われわれはこの点をどう理解すべきなのであろうか。